

能楽堂創建100年 福山で普及につとめる

かしのきばな
有限会社 榎木端
(喜多流大島能楽堂)



代表取締役社長 大島 政允氏
能楽師シテ方喜多流職分

大正3年、霞町に能楽堂を開設

大島さんは大島家4代目になる。初代の七太郎氏はもともと福山藩士で、藩お抱えの能楽師に指導を受けていた。明治維新後、師匠の跡を継ぎ、喜多流十四世宗家 喜多六平太師に師事し、備後地方一円に能楽を広めた。2代目の寿太郎氏が、100年前の1914年(大正3年)に現在の霞町に能舞台を建てたのが、喜多流大島能楽堂の始まりだ。この能舞台は残念ながら1945年(昭和20年)8月8日の福山空襲で焼失した。

3代目の久見氏は終戦3年後の1948年(昭和23年)に光南町の現在地に能舞台を再建した。

1971年(昭和46年)に建て替え、全国的にも珍しい個人の本格的な能楽堂として現在も伝統を引き継いでいる。

ちなみに法人名の「榎木端」は、江戸から明治にかけての当地の字名だという。各種公演や教室の依頼を受け入れるため、2004年(平成16年)法人組織を立ち上げた。

一家をあげて能の伝統を守る

大島さんは3代目の久見氏の後継者として育った。後を継がなければとはっきり自覚したのは中学生の頃だったという。「自分の運命。そのように決まっていると思った」。

12月に100周年記念公演

次世代に能を伝える

中学を卒業し、東京の家元のもとで修行を積み、1976年(昭和51年)に帰郷。それから福山を拠点に喜多流職分として活躍している。

長男で5代目になる輝久さんは現在、東京に居を構え、若手能楽師として活動している。その輝久さんが能の道に進むと決めたのが、やはり中学生の頃であったという。

長女の衣恵さんは喜多流で初の女性シテ方となり、現在も能楽師として活躍。次女の文恵さん、三女の紀恵さんも能楽講師として体験教室を行うなど、一家をあげて福山の能の伝統を守っている。

年4回開催している定期公演は、1958年(昭和33年)に始まり現在233回を数える。大島能楽堂では、第1回から能に対する理解を深めようと、上演前に出演者が壇上で解説を行っている。

当初、舞台上で解説を行うことは非常にめずらしいことだったが、大変好評で、今では全国の多くの舞台で行われている。体験教室は衣恵さんら三姉妹が中心になって指導にあたる。これも男性の能楽師と違ったアプローチで、より広い層に能の素晴らしさを伝えたいという思いからだ。

6月9日には「能楽堂でバツハ」と題して、クラシックコンサートを開催するなど、斬新な試みも行った。このように伝統を守りながらも先進性を併せもつ大島能楽堂は、福山の芸術文化の宝である。今年には能楽堂建設から100年の節目の年だ。12月に記念公演を予定している。大島さんは「木賊」という演目を演じる予定だ。ただ、「100周年で終わりということではない。次へつなげることが大切」と話す。

いつの日か、子・孫と共演、「三代能」を

大島さんは能について「動きが少ない独特の所作に魅力を感じている人も少なくない。見る人それぞれに魅力を探してほしい」と話す。

欧州やアジアなど海外公演の経験も豊富だが、

「海外の演劇人は能のことをよく知っている。敬意をはらって鑑賞してください」という。海外公演では役者の動きの少ない部分は難解ではと時間を短縮して演じようとする、「カットせず全編で」と要望されるそうだ。

輝久さんの長男、大島さんの孫にあたるのが4歳の伊織君だ。6代目となることも期待されるが、すでに6月に東京の舞台で初舞台を踏んでいる。「あと2、3年したら、3人が1番ずつ演じる『三代能』ができるかもしれない」と目を細める。

能の普及へ「体験学習で学んでいる子どもたちが大人になっても能に関心を持ってくれれば」と期待を寄せる。同時に「ますます能が地域に広がってほしい。演じる方としては、魅力的な舞台をお見せするだけ」と今後の活躍を誓った。

(取材・文 大陽新聞 塩田 聡)



▲第229回大島定期公演
能「百万」シテ大島政允



小学生向け体験学習▶



(有)榎木端

■所在地 福山市光南町2-2-2
■TEL (084) 923-2633
■FAX (084) 923-8730
■ホームページ
<http://www.noh-oshima.com>